

高等研究院フォーラム2006

「公正な科学研究に向けて－業績評価と研究倫理－」を開催

高等研究院フォーラム2006が、12月5日(火)、シンポジオンホールにおいて、学内外の研究者、学生、一般の方々など約100名の参加を得て、開催されました。

本フォーラムは、高等研究院教員を中心に、特定の研究テーマに主眼を置き、研究成果を広く学内外に発信するため年1回程度開催するもので、今回は、同院と本学公正研究委員会の主催により、高等研究院研究者育成特別プログラムの発足を記念して催されました。研究費不正使用、研究データ捏造、研究費申請書不正記載等、公正な科学研究にもとる問題が数多く発生している昨今、研究者の研究倫理が大きく問われていることから、「公正な科学研究に向けて－業績評価と研究倫理－」をテーマにし、「研究不正問題の現状を明らかにする」、「この問題の背景・原因を研究者の業績評価、研究補助、研究環境との関わりで検討する」、「公正な研究に向けて研究活動・研究補助・研究倫理教育のあり方などいかなる対応を図るべきかを考える」といった課題について、多様な観点で論じながら今後の方向を見出す機会になるよう企画されました。また、本学が7月に制定した「名古屋大学における研究上の不正行為に関する取扱規程」、「名古屋大学公正研究責任者及び公正研究委員会に関する規程」をアピールする目的も兼ねました。

フォーラムでは、まず、平野総長、北住高等研究院長のあいさつの後、奥村隆平同院副院長を司会とし、4名のパネリストによる講演が行われました。最初に、浅島 誠東京大学大学院総合文化研究科教授（日本学術会議科学者の行動規範に関する検討委員会委員長）が、「日本の研究者は今、どのような状況にあるのか」と題し、「研究上の不正問題については、発生を未然に防ぐことが重要であり、そのためには、研究倫理教育や、研究者間の人間関係も含めた健全な研究環境の醸成に向けて、組織的な取組を継続的に展開することが求められる」と述べ、池内 了総合研究大学院大学教授が、「研究者のモラル・評価・社会的責任」と題し、「研究者は、『倫理責任』、『説明責任』だけでなく『社会的責任』も全うすべきである」と強調しました。続いて、佐古田三郎大阪大学大学院医学系研究科教授（同大学同研究科研究公正委員会委員長）が、「科学の本質とその社会における“営み”について」と題し、「『科学は私達にとって一体どんなものなのか』というところから出発し、社会との関係を議論する必要がある。科学の本質を知り、社会との関係を知ってこそ初めてその倫理について語る事ができる」と述べ、毎日新聞社科学環境部「理系白書」取材班記者の永山悦子氏が、「『科学者＝性善説』



会場の様子

のままでもいいのか」と題し、不正事件の具体例をいくつか挙げた上で、「研究者の『小さなズル』＝倫理的無感覚を生みだしかねない研究環境の密室性」に対して警告を発し、問題提起をしました。

これらの講演を受け、コメンテーターの濱田道代法学研究科教授から4名のパネリストの発言についてまとめが、岡本耕平環境学研究科教授から「名古屋大学における研究上の不正行為に関する取扱規程」、「名古屋大学公正研究責任者及び公正研究委員会に関する規程」についての説明があり、続いて、パネルディスカッションが行われました。

フォーラムに引き続いて行われた懇親会では、パネリストの方々に加え、学内外の様々な分野の研究者など多くの皆さんが参加し、活発に議論する姿なども見られ、大変有意義なものとなりました。



講演する浅島教授



講演する佐古田教授



講演する池内教授



講演する永山氏